



海外の洞窟へ行ってみよう！

宮崎 朋彦 (MIYAZAKI, Tomohiko 明治大学地底研究部 OB 大阪府在住)
ケイビングジャーナル編集部

外国でケイビングを行なうことについて、読者の皆さんはどんなことをイメージするでしょうか？ 渉外が難しい、自分の技術レベルでは無理、時間的余裕がない、日本国内の洞窟で十分、といった実際の距離とともに、意識のなかでも遠いものになっているのではないのでしょうか？

確かに技術、費用、時間（準備・渡航・活動）などを費やすため安易に行けるものではないですが、活動の目的をはっきりさせることでより身近なものにすることができます。

ここでは活動の種類、活動するにあたってのポイント、日本人による過去の遠征事例などを紹介しますので、海外でのケイビングをより身近なものにしていだけたらと思います。

1. 海外ケイビングの魅力

なぜ外国でのケイビング活動を紹介するのでしょうか？ それはケイビングの面白さや奥深さをより知って欲しいからです。

まず洞窟規模としては、日本の洞窟よりも長く、深く、大きい洞窟が多くあります。最奥部へ到達するのに1日以上かかる洞窟、高低差200m以上の竖穴（2010年4月現在、日本では-204mの「入見穴見戸の穴」が入洞可能な最深竖穴）、ライトが端まで届かないホールなど、大規模な洞窟で活動することによって経験値が格段にアップできます。『ただ大きいだけでしょ？』と思う方もいるかも知れませんが、大きければ体力はもちろん、装備や技術、行動計画も違ってきます。これは経験しなければわかりません。

日本では見ることの出来ない氷洞窟、洞窟壁画、ホライモリやブラインドフィッシュ、グローワーム（ツチポタル）などの生物も大きな魅力のひとつです。コウモリグアノにしたって、「ディア洞窟」を見たら衝撃を受けることでしょう。

観光洞においても、洞窟保全への高い意識（二重

扉の洞口、人数制限、短時間照明、錆びにくい金属を使用した柵類、ガイド形式、洞窟学的アナウンス）や演出（照明方法、コース設定、アトラクション）など、一味違った洞窟が数多くあります。メリハリのある演出を見れば、いかに金網だらけの日本の観光洞が前時代的であるかもわかります。

また、活動するにあたっては、必ず現地の方々との交流があります。多くは現地ケイバーとなりますが、渉外先や宿泊先の方々、宿泊先で出会った人など、グローバルな仲間を作ることができます。特にケイバーとの交流は、その国のケイビング事情を知り、技術や知識が向上、次活動へのステップとなります。

これは個人的な意見ですが、日本でケイビングをしたいと連絡を取ってきた外国人に対し、自分自身も同じ立場であったことから、より親身になった対応をするようになります。それは日本のケイビングが世界に紹介されるチャンスでもあり、より日本人ケイバーが外国で活動しやすい環境になります。



ホライモリ的一种「プロテウス」(Postjnske Jame ミニ冊子より)

2. 活動の種類

海外ケイビングと一言でいっても、計画を密に立てなければならないものから気軽に行えるものまで、活動内容はいくつかあります。